URP Osaka City University
Newsletter
Issue 53, Nov.2021
大阪市立大学 都市研究プラザ ニューズレター第 53 号 2021 年 11 月

# 第 10 回東アジア包摂都市ネットワーク・ワークショップ「コロナ禍における社会的弱者のための包摂都市」

## The 10th East Asia Inclusive City Network Workshop "Inclusive Cities for Social Minorities under the COVID-19 pandemic"

2021 年 8 月 19 日（木）から 20 日（金）にかけて、第 10 回東アジア包摂都市ネットワーク（以下、EA-ICN）・ワークショップがオンラインで開催された。本ワークショップ（以下、WS）は、日本・韓国・台湾・香港における都市問題の解決に向けた研究や地域実践、行政施策に関わる経験交流を目的として、2011 年の台北開催に始まり、毎年各都市の持ち回りで開催してきたものであり、当初第 10 回は 2020 年 7 月にソウルでの開催を予定していた。しかし、新型コロナウイルスの世界的な流行により延期となり、第 10 回にして初のオンライン開催となった。以下では、当日のプログラムに沿って WS を振り返る。

・WS１日目

開会式後の基調講演では、全泓奎 URP 教授が「ポストコロナ時代における東アジア包摂都市ネットワークへの期待と展望」という題目で講演し、東アジア都市におけるコロナ対応を紹介した上で、コロナ禍による社会的弱者への様々な影響を指摘し、ポストコロナ時代においては、東アジア都市間交流がますます重要になると語った。

セッションⅠ「コロナ禍における東アジア都市」では、各国の現場レポートとして、ソウルのチョッパン地域における公営住宅建設に向けた住民運動や台湾における社会住宅運動を紹介する映像が上映された。

セッションⅡ「コロナ禍における社会的弱者の現実」では、コロナ禍に実施されたソウルの公共賃貸住宅入居者を対象とした調査結果（SH 公社）、コロナ禍における仮放免者の困難と社会参加の重要性（カトリック大阪大司教区社会活動センター・シナピス）、台湾の社会住宅を取り巻く状況や課題（OURs）、コロナ禍により悪化する香港の住宅問題（SoCO）等の報告があった。

セッションⅢ「コロナ禍における公共の役割と課題」では、コロナ禍における行政によるエッセンシャルワーカーの保護・支援施策（ソウル特別市城東区）、大阪府八尾市による特別定額給付金訪問勧奨事業（八尾市）、社会住宅におけるコミュニティ活性化施策（台北市）、香港の慈善団体によるホームレス支援（インパクト HK）等の発表があった。

・WS２日目

セッションⅣ「コロナ禍における市民社会の役割と可能性」では、韓国における児童虐待の現状と支援（緑の傘子供財団）、ベンチャー企業による子どもが社会で生きる力を養う教材・カリキュラム開発（スタートアップポップコーン株式会社）、台北萬華地区における社会的弱者に対する組織横断的支援アプローチ（崔媽媽基金会）、コロナ禍の香港における狭小住宅入居者支援（CCHA）等が紹介された。

10 周年記念特別セッション「東アジアの都市とホームレス」では、コロナ禍で露わとなった韓国のホームレス対策の問題（ホームレス行動）、東京の山谷地域における多様性を活かしたまちづくり（一般社団法人結 YUI）、コロナ禍の台北市におけるホームレス支援（芒草心慈善協会）、香港のホームレス支援団体による新たなサービスの開発（St, James Settlement）等に関する発表があった。

最終プログラム「総合討論」では、各国・都市の代表者 7 名が 2 日間の WS を振り返りながら、今後の EA-ICN の発展に向けた意見交換を行い、最後に阿部昌樹 URP 所長が「第 11 回は大阪で対面による交流ができれば」と来年への抱負を語り WS を締めくくった。

■矢野淳士（包摂都市ネットワーク・ジャパン）

The 10th East Asia Inclusive City Network Workshop was held online from 19th to 20th August, under the theme of "Inclusive Cities for Social Minorities under the COVID-19 pandemic." Participants from Japan, Korea, Taiwan, and Hong Kong reported on and exchanged their local practices and administrative measures against the coronavirus crisis. A total of 194 people participated in the two-day workshop and discussed how inclusive cities should be in the post-corona world. Although this was the first online workshop in the 10-year history, it brought about fruitful results for the future development of intercity exchanges in the East Asia.

プログラム・各報告タイトル

●8 月 19 日
・オープニングセレモニー
・基調講演：
全泓奎（URP 副所長）「ポストコロナ時代における東アジア包摂都市ネットワークへの期待と展望」
▽セッション 1：コロナ禍における東アジア都市
・10 周年記念映像
・東子洞チョッパン地域ドキュメンタリー（韓国）
・社会住宅運動の回顧（台湾）
▽セッション 2：コロナ禍における社会的弱者の現実
・コロナ禍による住居脆弱階層の現実（韓国）
・コロナ禍によって見えた難民移住者をめぐる課題と取り組み（日本）
・台湾社会住宅の発展過程と展望（台湾）
・感染症の状況下での住宅問題（香港）
▽セッション 3：コロナ禍における公共の役割と課題
・エッセンシャルワーカー保護・支援の地方政府の事例（韓国）
・コロナ禍での八尾市での特別定額給付金訪問勧奨事業（日本）
・台北市ユースイノベーション・フィードバック計画の融合的実践（台湾）
・親切の力（香港）
●8 月 20 日
▽セッション 4：コロナ禍における市民社会の役割と可能性
・With Covid-19、児童保護システムを調達するための市民社会の役割（韓国）
・子どもたちが、これからの社会で必要な力を育む（日本）
・居住支援と社会福祉サポートの連携による社会的弱者の困難を解決する試み（台湾）
・コロナ禍における地域支援（香港）
▽10 周年記念セッション：東アジアの都市とホームレス
・コロナ禍の時代を生きるホームレスの現実（韓国）
・山谷におけるホームレス支援（日本）
・社団法人台湾芒草心慈善協会の取り組み（台湾）
・ホームレスのための統合サービスの開発（香港）
▽総合討論

■主催
大阪市立大学都市研究プラザ、ソウル大学校アジア研究所アジア都市社会センター、SH ソウル住宅都市公社、ソウル研究院、ソウル市城東区、（社）韓国空間環境学会、韓国都市研究所、緑の傘子ども財団、시시한연구소、ICN-Japan、ICN-Taiwan

■主管
ICN-KOREA

本ワークショップは、文部科学省共同利用・共同研究拠点大阪市立大学都市研究プラザ「先端的都市研究拠点」による助成を受けて実施するものである。

## 「包摂都市ネットワーク・ジャパン（ICN-Japan）」の活動強化と第 1 回インクルーシブシティ研究会
## “Inclusive Cities Network Japan” and The 1st Research Society on Inclusive Urban Policy

本会は、これまで東アジアの諸都市との経験交流を図り、都市間交流や協力に向けた新たなモデルの確立に向けて取り組んできた。近年、新たなグローバル・ガバナンスの形成に向けたステークホルダー間のパートナーシップの構築にかかわる関心が高まっている。それに当たっては、都市間競争に向けてただ突き進むばかりではなく、より弱い立場にいる人びとを包み入れ、誰もが参加しやすい「包摂型都市（inclusive city）」を実現することが課題となっている。そのため本会は、都市社会を構成する多方面にわたる関連分野を専門とする研究者や、実社会の問題解決に取り組む実践家、政策形成にかかわる都市行政の担当者が一堂に会して相互に知見や資源を共有し、「万人のための都市(City for ALL)」づくりをめざす、都市間のネットワーク形成に資することを目的とした諸事業を行ってきた。

先日、本 NL でも紹介している「第 10 回東アジア包摂都市ネットワーク・ワークショップ」を開催したことを一つの結節点とし、今後の組織体制の強化に向けて、「都市行政ネットワーク・セミナー」を中心とする都市行政や NPO のネットワークを軸にした実践活動と、貧困・社会的包摂をテーマに、東アジア地域研究をフィールドとする学術活動を両輪とする体制へと再編することが合意された。

その関連行事として、8 月 28 日(土)に「第 1 回インクルーシブシティ研究会」をオンラインで開催した。当日は、上海交通大学陳映芳教授による基調講演の後、香港等からの研究者による英語セッション、そして日本語の報告セッションを設け、包摂型都市にかかわる議論を深めた。

こうした取り組みを通して、インクルーシブな都市行政の未来を担える若手実務家や、国外に広がる包摂型都市の形成にかかわるアクションリサーチャーの育成に資する場を引き続き設けていきたい。

■全 泓奎（URP 副所長／教授）

For the empowerment of the organizational structure, Inclusive Cities Network Japan (ICN-Japan) has combined practical activities like an "Urban Administration Network Seminar" joined by urban administrative bodies and NPOs, with academic collaborative works on poverty and social inclusion in the East Asia. ICN-Japan held the 1st meeting of the “Research Society on Inclusive Urban Policy" on August 28, as the first event after reorganization.

## コンサート「ピアノでできること／できないこと」

### Concert ”What you can / can’t do with piano”

本コンサートはピアニストの西村彰洋を招いて表記のテーマで中川眞により企画されたもので、２部構成をもち、第１部では H. ラッヘンマン、J.ウルフ、フォルマント兄弟、J.ケージ、野村誠、第２部では、七ッ矢博資、中川真、西村彰洋＋大阪南視覚支援学校生徒の各作品が演奏された。ピアノは西洋近代音楽の中央に居座る王さま楽器であるが、本コンサートでは現代の音楽の方法を借りながら、「ピアノ」と「西洋近代音楽」の脱構築を目論んだ。もちろん両者とも手強く、それがどこまで果たせたかといえば心許ない部分もあるが、意図は約 150 名の聴衆には伝わったのではないかと思う。

第１部は「楽器としてのピアノ」の脱構築で、ピアノに似て非なる楽器、すなわちトイピアノ、鍵盤ハーモニカ、アコーディンなどが演奏された。またラッヘンマン作品「Guero」では、ピアノの鍵盤を指で擦るだけの「カタカタ・・」といった奇妙な響きがホールに漂った。ピアニストが様々な鍵盤の上をサーフィンしてゆく姿は、ピアノという楽器の解体プロセスのように映った。第２部は、音楽の作り方の中に協働的なアイデアが重点的に投入された作品が並べられた。七ッ矢作品ではピアノとガムラン楽器という全く異質な音楽文化の遭遇がもたらされ、加えてコンテンポラリーダンサー（藤原理恵子）とジャワ舞踊家（冨岡三智）がそれに感応して踊った。９名の音楽家、演出家、美術家などによって協働的に作られた中川作品はコミュニティ音楽の新たな手法を提示した。しかしなんといっても本コンサートの白眉は、最後の西村＋大阪南視覚支援学校生徒作品であった。視覚に障害をもつ高校生３名が手の感触を最大限に活かす「内部奏法」にチャレンジ。聴衆をも巻き込むパフォーマンスは、現代音楽の最前線の姿として位置づけてもよいほどの力強いものであった。以上、本コンサートは様々な意味において「中心をずらす」ことに成功したのではないかと思う。

■中川眞（URP 特任教授）

## 2021 年度第 1 回 URP 特別研究員（若手・先端都市）合評会

### 1st Annual Workshop for URP Special Researchers (Young, Leading Edge Urban Studies)

2021 年度第 1 回 URP 特別研究員合評会 報告タイトル

1）孫琳：「福祉サービス供給主体の公益性モデルの構築」
2）藤原牧子：「子育て家庭の困難への早期発見・早期対応に関する総合相談拠点の可能性と他機関連携」
3）小谷真知代：「都市空間と移民労働者のモビリティの生産 -日系人労働者の移住産業から」
4）杉野衣代：「山谷の居住支援組織と社会開発実践」

9月15日（水）、2021 年度第 1 回 URP 先端的都市研究拠点・先端都市特別研究員（若手）合評会が、9 月 15 日（水）にオンラインにて開催された。本合評会は URP が「多様な人材の育成」を目的として実施してきた「先端都市研究員（若手）」公募で採用された若手研究員の研究中間発表の場であり、若手研究員がそれぞれの研究関心にもとづき意欲的に都市課題の解明に取り組んでいることを知る機会でもある。

合評会では、4 人の研究員から左記のタイトルにて報告があり、報告後には、教員からの質問・コメントが多数あった。今回の合評会では、終了後に外部評価委員会を予定していたため外部評価委員にも参加していただいたが、現場の実践知にもとづくコメントを外部評価委員から多くいただいた。これは、若手研究員にとって研究知と実践知とを架橋することになりえるといえ、たいへん有意義であったと思われるものであった。

■鄭栄鎮（URP 特任講師）

## 都市創造性コラム 16　Column for Urban Creativity 16
## 竹の創造性を動詞によって明らかにするとは：文化編集技法と VA・VE
## To Reveal the Creativity of Bamboo with Verbs: Cultural Editing Technique and VA･VE

トーマス・エジソンが、弟子によって京都・八幡市から送られてきた「竹」の薄片を燃やすことが、炭化し光り輝く「炭素繊維」が生まれた瞬間であった。電球のフィラメントとして使われ、その後タングステンに変更されるが、一連のプロセスは後年 GE の調達部長マイルズ氏によって VA や VE という経営工学手法となる。これは機能別のコスト分析を通してモノの価値を測ろうとするもので、モノづくりに欠かせない（「マイルズ賞」を参照）。炭素繊維はこれまでの素材（鉄やアルミ）よりも強く軽いことから、NASA が宇宙船に用い、ロケットやミサイル、それらの部品、ゴルフクラブやテニスのラケットに使われるに至る。考えてみれば、特定の製品より、競争力のある素材を開発したほうが効果的である。これを実践している企業が東レで、レーヨン糸から始まった。

創造力を伸ばすための訓練として、1936 年に GE で設計技術者を対象に実施された Creative Engineering Program（CEP）が嚆矢とされる。1947 年には、同社の購買部長であった L.マイルズが VA 手法を開発しており、創造力との関係から見ているという点は大変興味深い。人間の頭の動きは機能的に、吸収力（ものを観察したり、注意する力）、記憶力（ものを憶えたり、思い出す力）、推理力（ものを分析したり、判断する力）、創造力（アイデアを浮かばせ、引き出す力）に分けられるとする。

GE において、創造性とは「当面する問題を解決するために過去に獲得した知識、経験を解体結合して新しいアイデアを生み出すことである」と定義されており、全く新しいものを「無」から造り出すというのではなく、すでにある、あるいはもっている知識、経験を一度「解きほぐし」、その上で「別の形に結合する」ことであるとする。動詞（述語化）による価値とコストとの相関を試行したのがマイルズ氏であった。VA とは動詞によって製品および部品の機能を定義し、コストとの関数で価値を示そうとするエンジニアリングの手法である。1970 年 5 月には「創造性開発のために」という特集が組まれ、創造性を高めるためのグループ活動の在り方をはじめ、創造性の展開として「創意くふう提案制度」が議論されたことも注目される。

トヨタでは、日本を象徴する素材である「竹」がハンドルや内装パネルに採用された。「竹」のオーナメントパネルは、一度縦に裂き、積層させることで水平な直線模様を実現した。色も塗装ではなく、「いぶす」ことで自然の風合いを表現しようと試みている。「いぶす」とは、色を「差し引く」という文化編集の一つであるともいえるものである。さらに、Lexus GS には竹のハンドルが選択できる。高知の危機に瀕していた竹産業を継続させ、雇用を守った。

■岡野浩（URP 教授、経営学研究科併任教授）

Hiroshi OKANO *City, Culture and Society (Elsevier)Managing Editor, Emeritus・Creativity, Heritage and the City (Springer) Editor in Chief*

It is said that Edison burned flakes of bamboo sent by one of his apprentices from Yawata City, Kyoto, and that it was the moment when carbonized and shiny "carbon fiber" was invented. The Creative Engineering Program (CEP) conducted in 1936 at General Electric for design engineers to develop their creativity is considered to be the origin of the attention to “bamboo creativity.” By smoking the bamboo, the natural texture is expressed. Bamboos are also used in the steering wheel of Toyota Lexus and other products, which sustained endangered bamboo industry and protected employment in Kochi.

### 拠点外部評価委員会を開催

拠点認定が 2020 年 4 月に更新されてから初めての「拠点外部評価委員会」が、去る 9 月 15 日に開催された。現在は、高田一夫委員長（一橋大学名誉教授）、奥村健委員（一般社団法人よりそいネットおおさか業務執行役員）、箱田徹委員（天理大学人間学部准教授）の 3 名から構成されている。会合では、阿部所長の挨拶に続いて、2020 年度の活動内容が報告された。これに対して委員らから、次のように非常に有益な指摘が相次いだ。「以前に比べ財源が半減し，さらにコロナ禍でさまざまな制約を課せられている中で，共同研究の規模が維持され，それが若手の育成や成果の社会還元につながっているところは高く評価できる。」「（組織再編に際して）大阪という都市の特徴や大阪市大が歴史的に蓄積してきた研究実績の蓄積が基軸となるのではないか。特に，社会福祉に関する蓄積は重要である。」今回は合評会で若手研究員たちの発表を委員らに聞いていただいたうえで開催されたこともあり、時間をかけて深みのある議論がなされたように思える。

■綱島洋之（URP 特任講師）

URP Osaka City University 大阪市立大学 | Urban Research Plaza 都市研究プラザ

「都市研究プラザ」は、都市再生へのチャレンジとして大阪市立大学が 2006 年 4 月に設立した全く新しいタイプの研究教育組織です。「プラザ」という名前が示すように、都市をテーマとする人々が出会い、集まる広場をめざしています。先端的都市研究拠点として、現場や海外での研究・まちづくり活動、さらに、世界第一線級の研究者や政策家と国際的なネットワークを構築しています。

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138　tel.06-6605-2071
e-mail：office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp
所長 阿部昌樹　副所長 全泓奎 松本正三

大阪市立大学都市研究プラザ　ニューズレター　第 53 号
編集長（発行責任者）阿部昌樹
副編集長　全泓奎　水内俊雄　岡野浩
編集主幹　鄭栄鎭　小嶋尚実
https://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp